

〈書評〉

小浜正子著『一人っ子政策と中国社会』（京都大学学術出版会，2020年）

鈴木 岩 行

Iwayuki Suzuki

本書は、中国の経済発展にある面で大きな役割を果たしたと考えられる「一人っ子政策」について、日本の歴史研究者である著者が、それが中国の女性にとってどのようなものであったかを理解したいと考え、史料を読み、女性たちに話を聞いてまとめたものである。中国では、知識人層もその「罪」を背負いつつも、計画出産は中国の発展と人類への貢献であったとして、「一人っ子政策」を含む計画出産政策を容認している。中国で計画出産が普及し、国が子供の数を決める体制が成立した過程を、人々が生きる現場から辿り、どのようにして、国家による生殖コントロールが定着し、人々がそれを容認するようになったのかを、とりわけ生殖の当事者である女性の視点を重視しつつ、跡付けようとしている。本書の構成は、以下のとおりである。

序章では、はじめに、および本書の視点と資料、構成を述べている。

第1部 中国の人口問題と計画出産

第1章 中国の人口と人口政策—ジェンダーとリプロダクションからみる中国人口史、では前近代から近代までの中国の人口動態を通観して、それが家族の存続を目的とする社会的人為的な作為の結果で、ジェンダー要因（男子を望む傾向）が大きく影響しているとし、中華人民共和国の人口動態と人口政策の変遷を辿っている。

第2章 非合法墮胎から計画出産へ—中華人民共和国成立前後の性と生殖をめぐる言説空間の変容、では中華人民共和国成立前後のリプロダクションをめぐる言説の変化から、生殖が政治に統御される構造が成立したことを示している。計画出産政策を正当付ける目的として「国家の富強」や「速やかな社会主義建設」が掲げられ、生殖を国家が統御する構造は、確固としたものとなった。

第2部 上海の計画出産

第3章 都市の女性に浸透する計画出産—1950～60年代上海におけるリプロダクションの変化、では全国に先がけて計画出産が展開した上海で、どのように人々がそれを受け入れていったかを資料とインタビューから明らかにしている。上海の女性たちは、「産むこと／産まないこと」を選択する行為主体（エージェント）として自己形成していった。計画出産は、したたかなエージェントとしての女性たちの主体形成を促進すると同時に、生殖する女性個人の身体への国家・社会による介入の始まりを意味するものでもあった。

第4章 上海における一人っ子体制の成立—1970～80年代、では1980年前後の上海で、急速に「一人っ子体制」が普遍的になっていく状況を探っている。70年代までに上海では計画出産が普及していたが、人口圧力の高い上海では、79年に「例外なき一人っ子政策」が始まると、計画外の出産は急速になくなり、「一人っ子体制」が完成した。

第3部 中国農村の計画出産

第5章 先進的農村における計画出産の展開—遼寧省Q村、では計画出産が比較的順調に展開した村の20世紀後半のリプロダクションの変化を考察している。計画出産は、「子供を少なく産む」と

いう新たな規範として村に導入され、多くの子供を望む家父長制に抗して、出産と育児を担う女性が政策と同盟し、出産抑制が実現した。行政と医療の両面で優秀な女性幹部に恵まれていたこのQ村では、計画出産（すなわち国家の生殖への介入）は、当然の行政・医療システムの一環として定着した。

第6章 「遅れた」農村における計画出産の紆余曲折—湖南省B村、では計画出産がより複雑な展開を辿った村の状況を考察している。B村では規範以上の子供を産む人も多かったが、一人っ子政策が展開されるようになると、第2子を産んだら「絶育」（永久不妊手術）が要求されるようになり、ルールから外れた妊娠には人工流産が要求され、工作隊が押し掛ける野蛮な方法も採られるようになった。しかし80年代には、超過出産の子を産むような、規定から外れた生殖行動も頻繁に行われ、B村幹部にも黙認されていた。村の女性たちは、産みたい時には政策の裏をかいて「計画外」の子供を産み、産みたくないときは、家族の意向を無視して政策を利用するなど、希望する生殖行動を実現しようとするエージェンシーを発揮した。90年代以降、政策の執行が厳しくなり、この村でも1.5子体制（第1子が男なら子供1人、女なら間隔をあけて2人）が定着した。

終章では、1、中国の一人っ子政策は、1979年に突然始まったのではなく、1950年代以来の計画出産が強化されたものであること、2、計画出産は、多くの子供—とりわけ男の子—を産み育てよという伝統的な家族制度の圧力から女性を解放し、家父長制に抗して女性たちに産まない自由を獲得させた。しかし、一人っ子政策開始後は女性たちのリプロダクティブ・ヘルスとリプロダクティブ・ライツを大きく損なったこと、3、一人っ子政策が1世代以上実施され、中国経済の高度成長による社会変化もあり、男子の跡継ぎにこだわらない人が増えた。今後の中国の家族は、双系的な方向に変化せざるを得ない。してみると、一人っ子政策は、中国社会が男女平等でジェンダー公正な社会に向かうための重要な契機となるかもしれない、とまとめている。

本書の計画出産に関する研究は、文献資料と口述資料を用いたものである。文献資料は、新聞・雑誌などの公刊資料や地方志などを含む書籍と、公文書やその草稿などである。口述資料は上海および遼寧省Q村、湖南省B村で行ったインタビューである。インタビューは、医療幹部・行政幹部などの計画出産に関する仕事についていた人に対する仕事に関するものと、出産経験のある女性に自身のリプロダクションについて語ってもらったものである。後者は、基本的に同じ質問内容にそって自身の出産と生殖コントロールの経験について聞き、語ってもらっている。上海では、1950年代に出産経験のある女性18人と、その後の時期に出産した数人に著者がインタビューした。Q村とB村では、中国人女性共同研究者と著者を含む研究グループで、1950年代～2000年代に出産した村の女性、合計36人にインタビューしている。プライベートなことであり、本来表に出したくない「絶育」（永久不妊手術）や妊娠中絶、人工流産について、また超過出産を村幹部が黙認していたことについても語られている。このような内密な話が聞けるのは、年数が経っていることもあろうが、著者（および研究グループ）の研究への信頼感があったからであろう。参考文献を見る限りにおいて、著者は2006年から母子衛生政策について研究を積み重ねている。

ただし、「インタビューの内容は極めて繊細なものであることから、女性たちの仮名は、プライバシーに配慮して、あえてA-1のような記号で記した。これは同報告書（小浜他『中華人民共和国における生殖コントロールの進展と女性たちの対応』）で使用した記号と同一のものである。」（同書222頁）とあるので致し方ないが、番号と年齢が比例していない（例えば、A-1：1949生まれ、A-8：1938年生まれなど）ため、番号だけを見ると、年齢がイメージしづらいところがある。

中国の一人っ子政策は、1950年代以来の計画出産が強化されたものであり、1979年に突然始まった

のではない。計画出産は、多くの子供を産み育てよという伝統的な家族制度の圧力から女性を解放し、女性たちに産まない自由を獲得させた側面があったことも本書は明らかにしている。このため、1977年にインドのインディラ・ガンジー政権が、男性の精管結紮（パイプカット）手術を強行して倒れたようなことが、中国では起こらなかった（政治体制の違い、手術を受けるのが中国では主に女性であったことを考慮しても）と考えられる。一人っ子政策により今後の中国の家族は、男女双系的な方向に変化せざるを得ず、そのために中国社会が男女平等でジェンダー公正な社会に向かうのであれば、本書が一人っ子政策を含む中国近現代における計画出産の実態を明らかにしたことは、歴史的意義があると思われる。

（2020年10月2日 受稿）
（2020年10月11日 受理）